

身近過ぎる水

僕は陸上部に所属していて、中・長距離を走っています。僕の通学している学校の近くには、二つのダムがあります。片方のダムは、毎年ダムマラソンを開催していて、そのマラソンコースに、中・長距離のメンバーはよく走りにいきます。走っている途中には、景色を見たりしますが、その中でも僕には、「ダムの水が激減している」ということが印象に残りました。

小学校のときに行ったときは、それほど水量が減っているとは感じられませんが、最近顕著に感じられるほど水量が激減しています。ダムの底は見えて、乾ききって地割れがあるところもありました。ずっと雨が降っていて、ダムは増水していると思ったり、前来たときと水量はあまり変わらないように

山添村立山添中学校 三年

池住 達也

思いました。なぜたくさん雨が降っているのに水が、溜まらないのだろうと考えたとき、僕たちが使いすぎているのではないかと思いましたが。僕たちは必要なとき以外も水の出しっぱなしをしていることがよくあります。水は地球上に限りなくあると思われがちです。確かに水はありますがその水のほとんどが海水で、淡水であつても南極や北極の氷で私たちが普段利用できる水は限りあるものです。現在は海水の淡水化があります。しかしこれに頼っても使える水は増えません。海水の淡水化もされ始めましたが、使われる水の方が多くてはとも追いつきません。

みなさんは所持金が少なくなったり節約をします。身近にある預金通帳や財布の中を見れば、後どれだけ残っているか分かるからです。しかし水の場合はこのようにはい

きません。後どれぐらい水が残っているかが身近なものではわかりにくいし、蛇口をひねれば出てくる水が当たり前になっていきます。そのため水に対してあまり関心を持っていない人が多く、水という大切な資源が危機的状況におかれているといふ実感が湧きにくいので節水をしようと思えて深く考えられないと思います。

そこで、節水をどのようにすればいいのか具体的に調べれば、節水がより身近なものになり、意欲が湧いてくるのではないかと考えました。二〇〇五年現在で一人あたりの一日平均使用量が三〇七リットルでした。炊事・洗濯・入浴・水洗トイレなどに使われます。日本の年間使用量は約八三一億 m^3 で、その内、生活用水は約一九%もあります。この生活用水を減らすためには、一人一人が意識して、節水をしなければいけません。節水方法として、日常生活では、洗濯・炊事・洗面時の水の出しっぱなし・水洗トイレなどがあります。洗濯ではお風呂の残り湯の使用、炊事では流水で食器を洗うのではなく、水をためて洗う、洗面時は必要のない時はと

める、水洗トイレを使用するときには、水を流すときに大・小と書いてある方にひねると流水ができます。皆さんはこれらの節水方法は知っていますか？、少しの節水では効果は無いと思う方がたくさんいると思います。しかし、日本国民が一日一〇リットルの節水を一年間行くと、四五三万九四六八・六人分の水量の削減ができます。そのため少量の節水でも続ければ効果は十分にあります。

「身近な水」を「身近な節水」にできる日はいつ来るのでしょうか。明日からではなく、今日から節水、水について考えるように私たちがしていかなければいけません。